

原白圭と采蘋

原白圭は筑前秋月藩の儒官原古処の長男。寛政六年（一七九四）に生まれ、藩校稽古館および父古処に学ぶ。十四、五歳ごろ福岡藩の亀井南溟、昭陽に学ぶ。若くして漢学に長じ、詩才も發揮して神童と讃えられたという。のちに稽古館の訓導になり、二十歳で家督を相続するが、生涯病に悩まされ、三十歳で隠居。

原采蘋は江戸時代の代表的な女性漢詩人の一人。父古処は采蘋にたいして男性とすこしも変わらない教育をした。采蘋は病弱の兄弟と違い、大柄でたくましく、美人であったといわれている。学問も進み、詩にも才能を發揮。父とともに広瀬淡窓の咸宜園（大分県日田市）を訪れ、門人たちと詩会を開き、驚かせたという。生涯の大半を旅で過ごして一流の詩人たちと交流した。

村上仏山にとって、父の古処と長男白圭、長女采蘋の三人は短期間ではあったが、恩師であった。仏山は文政七年（一八二四）、十五歳の時、原古処の塾に兄と従兄弟とともに入門し、漢学を学んだ。その間、師の

古処が留守の時は、白圭、采蘋が代講を務めたので、仏山の兄弟は白圭、采蘋からも教えを受けた。しかし、古処の病で帰郷した。

ところが、文政十年ごろ、白圭は弓の師（築上町）の医師の家で病氣療養中、時々、みやこ町岩熊の藤本平山の「巖邑堂」で漢学を講義していた。仏山はそれを聞き、早速、駆けつけて、白圭の気迫のこもった厳しい指導を受けた。妹の采蘋もやってきて漢学の講義をし、詩作を指導した。

嘉永元年（一八四八）、采蘋は江戸での二十年間の生活を終えて、晩年山家（筑紫野市）で私塾を開いた。一方、仏山の水哉園は隆盛になり、詩人としても知られていた。采蘋はこれ喜び、詩を贈っている。

「隣国豊前の知り合いのあなた（仏山）を尋ねてきて、亡くなった兄弟のことを聞いて、いたずらに悲しみなげいたが、幸いなことにはあなたが学業を後世に伝えてくれて、我が家学が遠方にまで広まるのが喜ばしい」（原文は漢詩）と。仏山はこの詩をいつまでも大切にしていた。